

アルケイア―記録・情報・歴史―

第一〇号 二〇一六年三月 八九―九四頁

南山アーカイブズ

特集Ⅱ 「展示を利用した自校史教育の可能性」

趣旨説明

― 初等・中等・高等教育機関の

自校史教育の必要性和方策を考える ―

林 順子

南山大学経済学部経済学科

Introduction : Considering a Necessity and Measures of Education of One's Own School History in Elementary, Secondary and Higher Educational Institutions

Department of Economics, Faculty of Economics,
Nanzan University

HAYASHI Yoriko

Archeia: Documents, Information and History
No.10 March, 2016 pp.89-94
Nanzan Archives

趣旨説明

——初等・中等・高等教育機関の自校史教育の必要性と方策を考える——

林 順子

二〇一四年九月、学校法人南山学園史料室と南山大学史料室を統合した史資料保存利用施設、南山アーカイブズが、南山学園ライネルス館内に誕生した。この施設の目的は、「南山学園に関する史資料の収集、整理、保管、公開などを行ない、教育・研究に資すること」「今日までに形成されてきた学園のアイデンティティを再確認・検証し、今後の教育・研究に役立てること」「日本の高等教育や地域社会などの教育・研究に役立てること」の3つで、その全てに「研究」と並んで「教育」が含まれている。

二〇一五年一月の南山アーカイブズ常設展示室オープン⁽¹⁾を記念し、シンポジウムを開催するにあたり、そのテーマを「展示を利用した自校史教育の可能性」と設定したのは、当アーカイブズに「教育」という役割があるためである。

自校史教育が進んでいるのは、主に大学である。今から遡ること約一〇年前の二〇〇五年に実施されたアンケート調査で、回答のあった国立大学六三大学の内、自校教育授業を実施していたのは二二校、三三%にのぼる⁽²⁾。自校

史教育の導入は、公立、私立大学でも進行し、研究も増え、マスコミにもしばしば取り上げられるところとなった。⁽⁴⁾

それに比べれば小中高等学校の自校史教育は、時間的、またカリキュラム上の制約などもあって、遅れていると言える。小中高等学校のどのくらいの割合が自校史教育をおこなっているか、詳細な調査や研究結果は今のところ見当たらないが、それこそが大学以外での自校史教育の実施が遅れていることの証左となるう。

とはいえ、小中高等学校の自校史教育の例が全く無い訳ではない。初等から高等までの一連の教育機関を含む私立総合学園では、アイデンティティの確認および学園内部の各学校の連携という二つの目的から、自校史教育が必要と考えられている。そして、学習院のような実践例も、すでに見られる。⁽⁵⁾つまり、今後、大学と同様、小中高等学校でも自校史教育が始まり、広がっていく可能性は十分ありうるのである。⁽⁶⁾このシンポジウムでは、小学校に始まる各教育段階における自校史教育の意義、および、今回オープンした南山アーカイブズ常設展示室を自校史教育に活用する方策や課題を検討したい。

南山アーカイブズ常設展示室は、南山学園に所属する学校の設置・改変など比較的大きな事件を、時系列に沿って配置することで、私立総合学園である南山学園の歴史を叙述するものとなっている。もとより、この常設展示室は一般に公開されているが、南山学園内の施設でもある。研究教育機関として南山アーカイブズは、この展示室を、南山学園に所属する各校での自校史教育に積極的に利用してもらい、学園の中での有効活用を促す方策を考えなければならぬのである。

しかし、そもそも、自校史教育というものの自体が研究途上にあり、展示を自校史教育に活用する試みにいたっては、ほとんど検討されていない。もちろん、開設したばかりの南山アーカイブズ常設展示室の活用についての情報

も、現段階では皆無である。

そこで、今回は、報告者・コメンテーターとして南山学園の各校で自校史教育または展示を活用した教育を試みている教員を迎え、その経験と課題認識を踏まえつつ、南山アーカイブズ常設展示室を使つての自校史教育の、今後の計画や希望、課題を提示してもらうこととした。計画 (Plan)・実行 (Do)・評価 (Check)・改善 (Act) を繰り返し、継続的なステップアップを図る、いわゆる「PDCA サイクル」の中では、今回のシンポジウムの内容は、まだ「計画」の段階での検討でしかない。しかし、ここで互いに知識を共有することは、次の段階やサイクルを進めるうえでも意義のあることと考える。

ここでの報告・コメントとそれに続く議論が、今後の自校史教育実践および自校史展示活用にとって何らかの示唆を読み取ることができるものとなることを期待する。

註

- (1) 常設展示室は、「南山アーカイブズ」という組織としては新設であるが、「南山アーカイブズ」の前身のひとつ南山学園史料室は、同じライネルス館内に展示室を設けていた。その意味では、リニューアルオープンとなる。この経緯は、永井英治「南山学園史の叙述と展示」南山アーカイブズ編『南山アーカイブズ常設展示図録―神言会・聖霊会の来日から二一世紀の南山学園―』南山学園、二〇一五年に詳しい。

- (2) 大川一毅「大学における自校史教育の現況とその意義―全国

国立大学実施状況調査をふまえて―」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第八号、二〇〇六年、一一―二二頁 (<http://hdl.handle.net/10295/411>)。

- (3) 一例をあげれば、白川哲郎「大学史料と自校教育―大阪樟蔭女子大学の場合―」南山アーカイブズ『アルケイア』第六号、二〇一二年、がある。

- (4) 一例だけをあげれば、『読売新聞』二〇一四年八月一五日(東京朝刊)一四面で、追手門学院大学の自校史教育が紹介され、

大学の歴史や教育の意味、自身のあり方などを学生が考えるきっかけになったとしている。

- (5) 桑尾光太郎「私学における大学史編纂と大学アーカイブズ——学習院での経験から——」南山アーカイブズ『アルケイア』第九号、二〇一五年。

- (6) 筆者は教育学を専門としないが、公立の小中学校の場合、歴史教育の一環として、町村や学区単位の地域でその学校が果たしてきた役割を示すことができるのではないかと考え

る。その地域に数世代にわたり住み続けている生徒の場合には、自校史教育により、血縁者と“生きた”歴史をより深く共有できるであろう。他地域から移転してきた生徒もまた、最も身近なコミュニティである学校とそれを取り巻く地域史を知ること、地域や学校に愛着を持ちやすくなるかもしれないし、さらにその情報が親世代に伝われば、大人にとっても地域社会での人間関係が円滑化する可能性もあるのではないか。